

勤労女性の女性特有の疾患についての検診に対する意識調査

—第1報 年代による検診に対する意識—

坂本弘子¹⁾ 市川裕美子¹⁾ 佐藤真由美²⁾ 木村紀美³⁾

要旨

女性特有の疾患についての検診に対する意識は、年齢や婚姻状況、子供の有無に大きく左右されるのではないかと考え、年代による知識や検診に対する意識に焦点をあてた。その結果、子宮頸がん受診歴、乳がん検診受診歴については、年代による有意差はみられなかった。子宮頸がん検診の知識は、年代による顕著な差はみられなかったが、「検診を受ける」の項目に有意差がみられた。乳がん検診の知識については、年代の高い群に有意差がみられたが、自己触診法と乳がん検診の知識と必要性については有意差がみられず、「乳がん検診を受ける」の項目に有意差がみられた。

キーワード：勤労女性 女性特有の疾患 検診に対する知識 検診に対する意識

I. はじめに

近年、働く女性が増加し勤続年数も長くなっている。男女共同参画社会が目指される中、女性には男性に比べ出産や家事・育児の負担、女性特有の健康上の問題があり、就労を継続していくためには、これらの問題を解決していくことが必要である。働く女性の健康管理上の課題として、職場の健康診断が常勤の男性を中心とした内容であり女性のニーズにあっていないこと、生理休暇が取りにくいこと、職場のサポート体制の不備などがあげられてきた（女性労働協会 2004）。勤務先で乳がんや子宮がん検診を実施している割合は事業所規模や業種によって差があり、実施している場合でも年齢制限があるなど、すべての女性が職場で検診を受診できる状況にはない（厚生労働省 2002）。

女性特有の疾患の中でも乳がんは早い人では10代で発症する可能性があり、罹患率のピークは40～50代である。女性が最も罹りやすく平成20年の調査では、罹患率は人口10万

対で67.1となっており、乳がんの死亡数も増加傾向にある。乳がん検診などで早期がんを発見し治療する人が増えれば乳がん死亡率を減らすことができる。

また、働く女性を含めて晩婚化が進む中、職場で検診を受ける機会のない女性では、実際に妊娠を希望する時に初めて自分の健康上の問題に気づく場合がある（殿村 2007）。子宮頸がんは20代後半から増え40代前半がピークで若い女性に目立つがんであり、性行動のあるすべての女性が子宮頸がんになる可能性がある。

少子高齢化が進む中、女性の労働力は今後ますます貴重であり、検診で早期発見し治療ができれば健康で働き続けることができる。そこで、勤労女性を対象として乳がんと子宮頸がんについての知識や、検診に対する意識について調査し、今後の女性の健康教育への示唆を得ることを目的とした。

II. 研究目的

1) 八戸学院大学看護学科 講師 2) 八戸学院大学看護学科 助教 3) 八戸学院大学看護学科 教授

女性特有の疾患についての理解度や、検診に対する意識は、年齢や婚姻状況、子供の有無に大きく左右されるのではないかと考え、年代による知識や検診に対する意識に焦点を当てた。

III. 方法

1. 対象と調査期間

1) 対象施設

A 企業

2) 対象者

女性の正規職員 45 名

3) 調査期間

2019 年 7 月 22 日～8 月 10 日

2. 方法

1) 質問紙の構成

調査方法は、無記名自記式質問紙法とした。

調査内容は、対象者の個人要因、子宮頸がん、乳がんについての検診に対する内容とした。

個人要因は、年代、婚姻状況、子供の有無の設問とした。

子宮頸がんについては、検診受診歴、受診理由、受診しない理由、検診の内容（検診の受け方・受診要件・細胞診スクリーニング検査法）、子宮頸がんヒトパピローマウイルス（以下 HPV）やワクチンに関する知識、婦人科受診理由、子宮頸がん検診の必要性、今後検診を受けようと思うかの項目を設問においた。

乳がんについては、検診受診歴、受診理由、検診の間隔、検診の安心感の有無、受診しない理由、検診の内容（受診方法・受診要件・マンモグラフィー検査方法・医師による触診法）、乳がん自己触診法の知識と実施の有無、実施している人・実施していない人の理由、自己検診法をどこで知

ったか、乳がん検診は必要か、自己触診法は必要か、今後自己検診法を実施するか、乳がん検診を受けようと思うかの項目を設問においた（資料 1）。

3. 倫理的配慮

A 企業人事部へ、研究許可願、調査票の見本、研究計画書を提示し、口頭で説明し同意を得た。

対象者に対しては、調査票の表紙に、研究の動機、目的、方法、匿名性の厳守に関する配慮点を述べ、研究参加は自由意思であり、回答内容はすべて統計的に処理し、研究目的以外には使用しないことを明記した。調査票の配布は、研究者が A 企業人事部の担当者へ研究の趣旨、調査票の返送方法等について説明し配布をお願いした。また、研究同意については、調査票の返送をもって同意とみなすことを説明し、各調査票には切手および返信用封筒を添付し研究者の宛先住所・氏名を明記し個人ごと郵送してもらうようお願いした。

八戸学院大学・八戸学院短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：18-17）。

4. 分析方法

結果の分析には、4steps エクセル統計を用いた。年代別に注目し、29 歳以下と 30 歳代の群（A 群）と、40 歳代と 50 歳代の群（B 群）の 2 群に分け、子宮頸がん検診と乳がん検診に対する意識について比較する。

統計手法はそれぞれ χ^2 乗検定を用いた。

結果の統計的有意水準は 5%未満とした。

IV. 結果

1. 回収結果

A 企業人事部より研究参加の同意にもとづき、A 企業女性の正規職員 45 名に調査票

を配布し、回答数は44部（回収率97.8%）であった。対象者の個人要因の年齢に無記入のあった1名を除外して、43部を分析対象とした（有効回答率95.6%）。

2. 対象者の個人要因（表1）

対象者の年代は、29歳以下5名、30歳代6名、計11名、以下A群、40歳代17名、50歳代15名、計32名、以下B群であった。

婚姻状況の既婚では、A群2名、B群19名、未婚ではA群9名、B群10名であった。

子供の有無では、有がA群2名、B群21名、無がA群9名、B群9名であった。

3. 子宮頸がん検診について

1) 子宮頸がん検診受診歴（表2）

子宮頸がん検診を受けたことがある人は、A群8名、B群30名、受けたことがない人は、A群3名、B群1名であり、覚えていないと回答した人がB群に1名で有意差はなかった（P値.052）。

人は、A群4名、B群21名で、あまり知らないと回答した人は、A群4名、B群7名、全く知らないと回答した人は、A群3名、B群2名、無回答がB群に2名で有意差はなかった（P値.128）。

受診要件を知っていると回答した人は、A群3名、B群16名、あまり知らないと回答した人は、A群3名、B群11名、全く知らないと回答した人は、A群5名、B群3名、無回答がB群に2名で有意差はなかった（P値.057）。

細胞診検査法を良く知っていると回答した人は、A群2名、B群13名、あまり知らないと回答した人は、A群3名、B群10名、全く知らないと回答した人は、A群6名、B群7名、無回答がB群に2名で有意差はなかった（P値.186）。

3) 子宮頸がん と HPV に関する知識

（表4-1 表4-2）

子宮頸がんの病気について良く知っていると回答した人は、A群2名、B群10名、

表1 対象者の個人要因

	既婚	未婚	子供有	子供無
A群 n=11 (25.6%)	2名 (9.5%)	9名 (47.4%)	2名 (8.7%)	9名 (50.0%)
B群 n=32 (74.4%)	19名 (90.5%)	10名 (52.6%)	21名 (91.3%)	9名 (50.0%)

表2 子宮頸がん受診歴

受診歴	A群人数 (%)	B群人数 (%)	合計	P値
有る	8 (21.1)	30 (78.9)	38	
覚えていない	0 (0)	1 (100)	1	
無い	3 (75)	1 (25)	4	
合計	11 (25.6)	32 (74.4)	43	.052

2) 子宮頸がん検診の知識（表3） 検診の受け方を知っていると回答した

あまり知らないと回答した人は、A群6名、B群18名で、全く知らないと回答した

人は、A 群 3 名、B 群 3 名、無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P 値. 435)。

好発年齢について良く知っているとは、A 群 5 名、B 群 15 名、あまり知らないとは、A 群 4 名、B 群 11 名、全く知らないとは、A 群 2 名、B 群 5 名、無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P 値. 942)。

子宮頸がんの原因について良く知っているとは、A 群 1 名、B 群 12 名、あまり知らないとは、A 群 5 名、B 群 14 名、全く知らないとは、A 群 5 名、B 群 4 名、無回答が B 群に 2 名で有意差はなかった (P 値. 067)。

HPV の感染経路について良く知っているとは、A 群 3 名、B 群 14 名、あまり知らないとは、A 群 2 名、B

群 13 名、全く知らないとは、A 群 6 名、B 群 4 名、無回答が B 群に 1 名で A 群に感染経路について知らない人が有意に多かった (P 値. 040 P<0.05)。

HPV ワクチンで予防できることについて良く知っているとは、A 群 3 名、B 群 13 名、あまり知らないとは、A 群 5 名、B 群 13 名、全く知らないとは、A 群 3 名、B 群 5 名、無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P 値. 710)。

HPV ワクチンを受けられることについて良く知っているとは、A 群 1 名、B 群 13 名、あまり知らないとは、A 群 5 名、B 群 10 名で、全く知らないとは、A 群 5 名、B 群 8 名、無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P

表 3 子宮頸がん検診の知識

検診受け方	A 群人数 (%)	B 群人数 (%)	合計	P 値
良く知っている	4 (16)	21 (84)	25	
あまり知らない	4 (36.4)	7 (63.6)	11	
全く知らない	3 (60)	2 (40)	5	
無回答	0	2	2	
合計	11 (26.8)	30 (73.2)	41	.128
受診要件				
良く知っている	3 (15.8)	16 (84.2)	19	
あまり知らない	3 (21.4)	11 (78.6)	14	
全く知らない	5 (62.5)	3 (37.5)	8	
無回答	0	2	2	
合計	11 (26.8)	30 (73.2)	41	.057
細胞診検査法				
良く知っている	2 (13.3)	13 (86.7)	15	
あまり知らない	3 (23.1)	10 (76.9)	13	
全く知らない	6 (46.2)	7 (53.8)	13	
無回答	0	2	2	
合計	11 (26.8)	30 (73.2)	41	.186

坂本弘子：勤労女性の女性特有の疾患についての検診に対する意識調査
 —第1報 年代による検診に対する意識—

値.216).

HPV ワクチンを受けられることについて良く知っているとは回答した人は、A 群 1 名、B 群 13 名、あまり知らないとは回答した人は、A 群 5 名、B 群 10 名で、全く知らない

と回答した人は、A 群 5 名、B 群 8 名、無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった(P 値.216).

受けたことがあるとは回答した人は、A 群 B 群 1 とともに 0 人、覚えていないとは回答し

表 4-1 子宮頸がんとヒトパピローマウイルス (HPV) に関する知識

子宮頸がんの病気	A 群人数 (%)		B 群人数 (%)		合計	P 値
良く知っている	2	(16.7)	10	(83.3)	12	
あまり知らない	6	(25)	18	(75)	24	
全く知らない	3	(50)	3	(50)	6	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.435
好発年齢						
良く知っている	5	(25)	15	(75)	20	
あまり知らない	4	(26.7)	11	(73.3)	15	
全く知らない	2	(28.6)	5	(71.4)	7	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.942
HPV 感染原因						
良く知っている	1	(7.7)	12	(92.3)	13	
あまり知らない	5	(26.3)	14	(73.7)	19	
全く知らない	5	(55.6)	4	(44.4)	9	
無回答	0		2		2	
合計	11	(26.8)	30	(73.2)	41	.067
感染経路						
良く知っている	3	(17.6)	14	(82.4)	17	
あまり知らない	2	(13.3)	13	(86.7)	15	
全く知らない	6	(60)	4	(40)	10	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.040*
HPV ワクチン						
良く知っている	3	(18.8)	13	(81.2)	16	
あまり知らない	5	(27.8)	13	(72.2)	18	
全く知らない	3	(37.5)	5	(62.5)	8	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.710

*P<0.05

た人はA群1名,B群3名,ないと回答した人は,A群10名,B群28名,無回答がB群に1名で有意差はなかった(P値.832).

日常の話題にするかについて,あると回答した人は,A群1名,B群5名,どちらでもないと回答した人は,A群2名,B群6名,ないと回答した人は,A群8名,B群20名,無回答がB群に1名で有意差はなかった(P値.866).

詳しい情報を知りたいかについて知りたいと回答した人は,A群1名,B群11名,どちらでもないと回答した人は,A群8

名,B群18名,興味がないと回答した人は,A群2名,B群2名,無回答がB群に1名で有意差はなかった(P値.279).

4) 子宮がん検診の必要性 (表5)

検診は必要と回答した人は,A群5名,B群23名,どちらでもないと回答した人はA群5名,B群7名,必要でないと回答した人は,A群に1名で,無回答がB群に2名で有意差はなかった(P値.106).

表4-2 子宮頸がんヒトパピローマウイルス (HPV) に関する知識

ワクチン接種	A 群人数 (%)		B 群人数 (%)		合計	P 値
良く知っている	1	(7.1)	13	(92.9)	14	
あまり知らない	5	(33.3)	10	(66.7)	15	
全く知らない	5	(38.5)	8	(61.5)	13	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.216
受けたことがある						
ある	0		0		0	
覚えていない	1	(25)	3	(75)	4	
ない	10	(26.3)	28	(73.7)	38	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.832
子宮頸がんの話題						
ある	1	(16.7)	5	(83.3)	6	
どちらでもない	2	(25)	6	(75)	8	
ない	8	(28.6)	20	(71.4)	28	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.866
情報の希望の有無						
知りたい	1	(8.3)	11	(91.7)	12	
どちらでもない	8	(30.8)	18	(69.2)	26	
興味がない	2	(50)	2	(50)	4	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.279

坂本弘子：勤労女性の女性特有の疾患についての検診に対する意識調査
—第1報 年代による検診に対する意識—

5) 子宮頸がん検診の意思 (表5)

検診を受けると回答した人は、A群1名、B群19名、機会があれば受けると回答した人は、A群10名、B群9名、受けないと回答した人は、B群3名で無回答がB群に1名で、B群の方が優位に検診を受けると回答した人が多かった(P値.004).

4. 乳がん検診について

1) 乳がん検診受診歴 (表6)

乳がん検診を受けたことがある人は、A群4名、B群32名、受けたことがない人は、A群7名でB群は全員受けていた(P値

8.15).

2) 乳がん検診の知識 (表7)

検診の受け方を知っていると回答した人は、A群3名、B群28名、あまり知らないと回答した人は、A群6名、B群2名、全く知らないと回答した人は、A群1名、B群1名、無回答がA群B群ともに1名でB群の方が検診の受け方を知っていると答えた人が有意に多かった(P値.001).

受診要件を知っていると回答した人は、A群1名、B群27名、あまり知らな

表5 子宮頸がんは必要か 今後検診を受けようと思うか

子宮頸がんの病気	A群人数 (%)		B群人数 (%)		合計	P値
検診は必要か						
必要	5	(17.9)	23	(82.1)	28	
どちらでもない	5	(41.7)	7	(58.3)	12	
必要でない	1	(100)	0	(0)	1	
無回答	0		2		2	
合計	11	(26.8)	30	(73.2)	41	.106
検診を受けるか						
受ける	1	(5)	19	(95)	20	
機会があれば	10	(52.6)	9	(47.4)	19	
受けない	0	(0)	3	(100)	3	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.004*

表6 乳がん受診歴

受診歴	A群人数 (%)		B群人数 (%)		合計	P値
有る	4	(11.1)	32	(88.9)	36	
覚えていない	0	(0)	0	(0)	0	
無い	7	(100)	0	(0)	7	
合計	11	(25.6)	32	(74.4)	43	8.15

*P<0.05

いと回答した人は、A群4名、B群2名、全く知らないと回答した人は、A群5名、B群2名、無回答がA群B群ともに11名でB群の方が受診要件を知っている人が有意に多かった(P値.000).

マンモグラフィーを良く知っている
と回答した人は、A群6名、B群31名、あまり知らないと回答した人は、A群2名、B群はいなかった。全く知らないと

回答した人は、A群2名でB群はいなかった。無回答がA群B群ともに1名でB群の方がマンモグラフィーを知っている人が有意に多かった(P値.002).

医師による触診法を良く知っている
と回答した人は、A群5名、B群30名、あまり知らないと回答した人は、A群3名、B群1名、全く知らないと回答した人は、A群2名でB群はいなかった。無

表7 乳がん検診の知識

検診受け方	A群人数 (%)		B群人数 (%)		合計	P値
良く知っている	3	(9.7)	28	(90.3)	31	
あまり知らない	6	(75)	2	(25)	8	
全く知らない	1	(50)	1	(50)	2	
無回答	1		1		2	
合計	10	(24.4)	31	(75.6)	41	.001*
受診要件						
良く知っている	1	(4)	27	(96)	28	
あまり知らない	4	(66.7)	2	(33.3)	6	
全く知らない	5	(71.4)	2	(28.6)	7	
無回答	1		1		2	
合計	10	(24.4)	31	(75.6)	41	.000*
マンモグラフィー						
良く知っている	6	(16.2)	31	(83.8)	37	
あまり知らない	2	(100)	0	(0)	2	
全く知らない	2	(100)	0	(0)	2	
無回答	1		1		2	
合計	10	(24.4)	31	(75.6)	41	.002*
医師による触診法						
良く知っている	5	(14.3)	30	(85.7)	35	
あまり知らない	3	(75)	1	(25)	4	
全く知らない	2	(100)	0	(0)	2	
無回答	1		1		2	
合計	10	(24.4)	31	(75.6)	41	.003*

*P<0.05

坂本弘子：勤労女性の女性特有の疾患についての検診に対する意識調査
 —第1報 年代による検診に対する意識—

回答がA群B群ともに1名でB群に医師による触診法を知っている人が有意に多かった(P値.003).

群1名,無回答がA群に2名,B群1名でB群に自己触診法を知っている人が有意に多かった(P値.023).

3) 自己触診法の知識と実施状況 (表8)

自己触診法を良く知っていると回答した人は, A群4名,B群17名, あまり知らないと回答した人は,A群2名,B群13名, 全く知らないと回答した人は,A群3名,B

自己触診法を実施していると回答した人は, A群0名,B群7名, 時々と回答した人は,A群5名,B群9名, 実施していないと回答した人は,A群4名,B群15名, 無回答がA群に2名B群1名で有意差はなかった(P値.110).

表8 自己触診法の知識と実施状況

自己触診法	A群人数 (%)		B群人数 (%)		合計	P値
良く知っている	4	(19.1)	17	(80.9)	21	
あまり知らない	2	(13.3)	13	(86.7)	15	
全く知らない	3	(75)	1	(25)	4	
無回答	2		1		3	
合計	9	(22.5)	31	(77.5)	40	.023*
自己触診実施状況						
実施している	0	(0)	7	(100)	7	
時々	5	(35.7)	9	(64.3)	14	
実施していない	4	(21.1)	15	(78.9)	19	
無回答	2		1		3	
合計	9	(22.5)	31	(77.5)	40	.110

*P<0.05

表9 乳がん検診・自己触診法は必要か

乳がん検診は必要か	A群人数 (%)		B群人数 (%)		合計	P値
必要	7	(21.9)	25	(78.1)	32	
どちらでもない	3	(33.3)	6	(66.7)	9	
必要でない	1	(100)	0	(0)	1	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.287
自己触診は必要か						
必要	9	(31)	20	(69)	29	
どちらでもない	1	(8.3)	11	(91.7)	12	
必要でない	1	(100)	0	(0)	1	
無回答	0		1		1	
合計	11	(26.2)	31	(73.8)	42	.133

4) 乳がん検診の必要性 (表 9)

検診は必要と回答した人は A 群 7 名, B 群 25 名, どちらでもないと回答した人は, A 群 3 名, B 群 6 名, 必要でないとして回答した人は, A 群に 1 名で, 無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P 値. 287).

答した人は, A 群 10 名, B 群 6 名, 受けないと回答した人は, A 群 B 群ともに 0 名で, 無回答が B 群に 2 名で, B 群に検診を定期的に受けると回答した人が有意に多かった (P 値. 000).

5) 自己触診法の必要性 (表 9)

触診は必要と回答した人は, A 群 9 名, B 群 20 名, どちらでもないとして回答した人は, A 群 1 名, B 群 11 名, 必要でないとして回答した人は, A 群に 1 名で, 無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P 値. 133).

V. 考察

2 群の個人要因の特徴として, 既婚, 子供有が A 群 1 割で B 群は 9 割であった. 年齢がすすむにつれて婚姻, 子供有は想定内であった. しかし, 未婚の割合と子供無について 2 群を比較すると同程度であったことから, 今回の結果からは, 女性特有の疾患についての検診や健康教育を行ううえで年齢だけでは測れないことが伺える.

6) 自己触診法を実施するか (表 10)

触診は必要と回答した人は, A 群 6 名, B 群 15 名, 少し思うと回答した人は, A 群 4 名, B 群 14 名, 思わないとして回答した人は, A 群に 1 名, B 群 2 名, 無回答が B 群に 1 名で有意差はなかった (P 値. 886).

また, 子宮頸がん受診歴をみると, B 群のほうが有ると答えた割合が多く, A 群のほうが少ない結果であった. しかし, B 群の中には受診をしたことを覚えていないや, 受診したことがない人もおり, 何かしらの機会がなければ受診しないことがわかる. 下開¹⁾は, 女性にとって婦人科の診察への抵抗感が高いと述べており, 職場全体で受診の機会を設けること,

7) 乳がん検診の意思 (表 10)

検診を定期的に受けると回答した人は, A 群 1 名, B 群 24 名, 機会があればと回

表 10 自己触診法・乳がん検診を受けようと思うか

自己触診実施するか	A 群人数 (%)	B 群人数 (%)	合計	P 値
思う	6 (28.6)	15 (71.4)	21	
少し思う	4 (22.2)	14 (77.8)	18	
思わない	1 (33.3)	2 (66.7)	3	
無回答	0	1	1	
合計	11 (26.2)	31 (73.8)	42	.886
乳がん検診受けるか				
定期的に	1 (4)	24 (96)	25	
機会があれば	10 (62.5)	6 (37.5)	16	
受けない	0 (0)	0 (0)	0	
無回答	0	2	2	
合計	11 (26.8)	30 (73.2)	41	.000*

*P<0.05

医療機関を受診しやすい職場環境を整備することが必要であると考える。

また、子宮頸がん検診についての知識をみると検診の受け方、受診要件、細胞診検査法のすべての項目でB群のほうがよく知っていると言った割合が多かったが、中には全く知らないと言った人の割合はA群とほぼ同程度であり顕著な差はみられず、有意差もみられなかったことから、年齢が高いことで知識や検診に対する意識があるとはいえない。

HPVに関する知識についてみると、まったく知らないと言った人の割合がB群のほうが多い結果であり、子宮頸がんの話題や詳しい情報を知りたいと言った人はB群が多かった。今後検診を受けるかについては、A群には受けないと言った人はなく、B群に受けないと言った人がおり、有意差がみられた。今後、受けない理由は何か検証することが必要であると考える。

乳がん受診歴では、B群は全員受けたことがあり、職場検診の項目に組み込まれていたA群に関しては受診要件に満たない年齢の人は受けていない状況であった。このように受診の機会があれば受診行動がとれるため、職場全体で取り組むことが検診率向上に直結することがわかる。

乳がん検診の知識については、検診の受け方、受診要件、マンモグラフィー検査、医師による触診法すべてにおいてB群のほうがよく知っていると言っており、有意差がみられた。自己触診法の知識と実施するかの項目では有意差がみられなかったが、「乳がん検診を受けるか」の項目には、有意差がみられた。乳がんについては、有名人の乳がん体験の報道などの影響もあり、テレビの影響も多いのではないかと考えられる。

また、子宮頸がんは20代後半から増え40代前半がピークで若い女性に多く、乳がんは早い人では10代で発症する可能性があり、罹患率のピークは40～50代であるといわれている。

年代で区切るのではなく、受診の機会を設けることや、知識の普及を今後も推奨していくことが必要であると考える。

VI. 研究の限界

今回の研究では、A企業の常勤を対象に調査し、年代による検診に対する知識と意識について調査を実施した。年代を20歳代以下と30歳代、40歳代と50歳代以上と2群で比較したが、対象者の数が少ないことと、人数に偏りがあり検診に対する健康教育を考えるには更なる調査分析が必要であると考えた。

VII. 結語

1. 子宮頸がん受診歴、乳がん検診受診歴については、年代による有意差はみられなかった。
2. 子宮頸がん検診の知識は、年代による顕著な差はみられなかったが、検診を「受ける」の項目に有意差がみられた。
3. 乳がん検診の知識については、有意差がみられたが、自己触診法と乳がん検診の知識と必要性については有意差がみられず、「乳がん検診を受ける」の項目に有意差がみられた。

VIII. 謝辞

本研究の主旨を理解し、調査にご協力を頂いたA企業常勤の女性職員に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 下開千春：女性の病気に対する不安とその要因、「Life Design Report」9-10、16-27.2006
- 2) 大川聡子他：乳がん検診・自己触診法の意識を高める啓発運動一年齢差に着目して—。

- 大阪府立大学看護学部紀要, 19: 1 - 10.2013.
- 3) 中村和代他：子宮頸がん検診の受診行動への影響因子と受診率向上に向けた取り組みに関する文献検討. 人間看護学研究, 13 : 51 - 57.2015.
 - 4) 梅澤敬他：30歳未満の子宮頸がんに対する意識とがん検診受診要因に関する研究. 厚生指標, 59 : 17 - 22.2012.
 - 5) 伊藤久美子：就労妊婦の健康問題と研究課題. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 88 : 291 - 301.2003.
 - 6) 佐藤真由美他：婦人科がん術後患者の生活支援に係る倫理的課題－退院後電話相談の内容からの考察－. 日本看護倫理学会誌, 8 : 17 - 24.2016.
 - 7) 黒田薫他：働く若年女性の生活習慣の実態－勤務形態別の分析と評価－. 園田学園女子大学論文集, 45 : 159 - 166.2011.